

昭和28年大災害メモリアル企画「防災シンポ」9月24日のご案内

宇治川・榎島堤防は、大丈夫か、天ヶ瀬ダム再開発1500トンの放流を再検証しよう

堤防強度問題に詳しい 軽部 大蔵・神戸大学名誉教授も参加

宇治市最悪の日と言われた昭和28年9月の大水害から55年目を迎えています。当時、9月24日午後から降り続いた雨で宇治川の水位が上昇し、観月橋の下流で宇治川堤防が決壊。巨椋池が復活（右の写真、伊勢

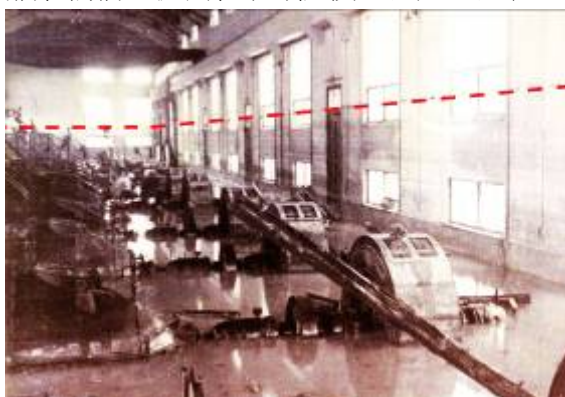


田から小倉付近を見る。小倉地域は完全に水没）喜撰橋、橘橋が流出、平等院横の堤防が決壊寸前となるなど家屋の流出、全壊など大惨事となりました。

防災を考える市民の会では、28年災害メモリアル企画として「防災シンポ」を企画しました。

今、強行されようとしています天ヶ瀬ダム再開発事業では、当時と同じような流量を人工的に2週間近くも宇治川に流そうとするものです。

「脆弱な堤防がもつのか」など不安の声が地元から出ています。今回のシンポには、堤防強度問題に詳しい 軽部 大蔵・神戸大学名誉教授にも参加していただけることとなりました。天ヶ瀬ダム再開発計画の再検証を行います。お気軽にご参加ください。



写真は、旧巨椋池排水機場内の浸水（点線は最高浸水位）

と き 9月24日（水）午後6時半～8時半 場所ゆめりあ宇治（JR宇治駅前）

一部 中川 学・国土研事務局長 28年災害と宇治川改修問題

巨椋池の諸問題、京都南部の内水災害問題や宇治川水害問題を熟知している氏が現状を整理して報告していただきます。

軽部大蔵・神戸大学名誉教授 堤防強度について

軽部先生は、社団法人地盤工学会関西支部の顧問もされています。堤防強度とはどのように見ればいいのかなど先生のお話は今から楽しみです。

二部 宇治川堤防が何で危ないのかなどを参加者の皆さんも参加していただいて討論

参 加 入場は自由です。資料代等300円のカンパをお願いします。

この後、講師を囲む懇親会（実費3000円位）も考えています。

主 催 防災を考える市民の会

9月15日（月）「**会**」ダム周辺「**活断層**」地質現地説明会 **報告****天ヶ瀬ダム周辺に「活断層」 整備局の調査不備 より明確に**

防災を考える市民の会は、9月15日（月）午前10時から午後3時まで天ヶ瀬ダム周辺で発見された「活断層」の現地説明会を開催しました。

説明会は朝10時に京阪宇治駅に集合しタクシーに分乗して天ヶ瀬ダムより400M地点に移動。紺谷事務局長、志岐代表より「活断層」と判断した理由などについて詳細に報告しました。

この後、徒歩で天ヶ瀬ダム周辺、志津川、明星町、菟道の断層について調査説明を行いました。特に整備局が公表した天ヶ瀬ダム直下の断層（F-0断層）については、「最初に見学した活断層と平行して走っており、活動時期が同じである可能性が高い。しかも幅16mと大きい断層で100mのずれが確認できる。」との報告もされました。

以下紺谷事務局長の活断層報告内容です。

1 7月3日天ヶ瀬ダム管理事務所で、「地質説明会」がおこなわれ、「天ヶ瀬ダムから3km以内に活断層は存在しない」との説明がなされ、その後現地説明会が行われた。この「地質説明会」は、そもそも宮本博司流域委員会委員長から、防災を考える市民の会の志岐代表に、「地質に関する見解を国交省とすりあわせてほしい」との要望があり、志岐代表と岩井琵琶湖河川事務所副所長との間で、国交省の調査結果について検討会、意見交換会とすることが事前に確認されていたものである。岩井琵琶湖河川事務所副所長はその確認を反故にして、一方的に「活断層はない」との見解を押しつける「地質説明会」を強行しようとした経過がある。しかしながら、事実は見解の押しつけによってきまるものではない。



発見した活断層露頭の前で参加者の質問に答える志岐代表（右）と紺谷事務局長（中央）



写真 1



写真 2

2 国交省の案内によるポイント⑤では「大阪層群と基盤は不整合で接する」と説明がなされたが、防災を考える市民の会の志岐および紺谷は現場において露頭の観察範囲を広げて、「活断層の可能性あり」と指摘した。

その後防災を考える市民の会で、改めて現場に行き、ポイント⑤が不整合ではなく活断層の露頭であることを確認し、8月22日の流域委員会に、天ヶ瀬ダムから約2kmの範囲にある2件の活断層露頭を含めて報告した。



写真 3

3 ポイント⑤地点の活断層の詳細

ポイント⑤の断層は天ヶ瀬森林公園に向かう道路、海拔約100mのところで基盤の丹波層群と断層で接している。断層は第四紀層である大阪層群を切っていることから活断層と判定できる。

すでに報告したレポートの写真とスケッチに示したように、断層の走向・傾斜はほぼEW, 70N方向である。大阪層群の礫層は断層から3m以上離れた位置では、礫はほぼ水平にならんでいる（写真1）が、断層の付近約2m～3mの範囲で配列が乱れ、礫層の中に、丹波層群の巨礫が介在する（写真2）。破碎帯近くでは、礫は断層面に沿って移動し、「ハ」の字のように配列するものがみられる（写真3）。また断層面に平行になって縦に配列するようになり、一部には割れて断層面に沿って引き離されるものが見られる（写真4）。



写真 4

以上のように明らかに、第四紀層である大阪層群は断層によって変形を受けており、ポイント⑤の断層は活断層である。

との現地で説明が行われました。

整備局は、9月12日に突如、天ヶ瀬ダム再開発事業の地質調査結果の発表を行い、ホームページに掲載しました。「7月3日に開催した説明会の結果もとりまとめて掲載した」と説明していますが、7月3日の説明会の報告内容そのままで、当日、問題箇所の再調査を要請されたことなどの記載もなく、しかも「なぜ2ヶ月も経過してからの掲載」なのかマスコミ関係者からも疑問の声が出ています。